

ノ啄木鳥ケラツキト成テ、堂舎ヲツ、キ亡サントシケルニ、太子ハ鷹ト變ジテ、カレヲ降伏シ給ケリ、サレバ今ノ世マデモ、天王寺ニハ啄木鳥ノ來ル事ナシトイヘリ、昔モ今モ怨靈ハオソロシキ事也、

〔日本紀略桓武〕延曆十六年十月庚申、有啄木鳥入前殿、明日車駕將幸于交野、緣斯而止、

〔甲陽軍鑑品十一〕第三十四、一此御對陣、正月〇永祿二年十八日より同年四月廿日迄、九十三日なり、日夜の

せりあひに、武田方跡部大炊介、一度松田尾張におはれたるより外は、みな小田原北條衆をくれなり、然れ共あまりに長陣故、信玄公家老衆をめし、口ぶりをき、給へば、〇中馬場美濃は、けらつ

つきがむしをたべるに、よの鳥にちがひ、あなのうしろをつ、き、口へ出るを取下され候と申す、

〔武江産物志〕山鳥類 啄木鳥けら川口邊也、千住、

〔大和本草山鳥十五〕ケラ 其大サ鳩ホドアリ、インコニ似タリ、日光山ニアリ、ケラツ、キニハ非ズ、

〔新撰字鏡鳥餘〕餘據反、鷹加良須、

〔倭名類聚抄羽族十八〕鳥 唐韻云、鳥哀都反、和名加良須、孝鳥也、兼名苑云、鳥一名鷗音阿、字爾雅云、純黑而反哺

者謂之鳥哺薄故反、食在口也、

〔箋注倭名類聚抄鳥七〕按加良須、以鳴聲得名、〇中所引文原書雅無載、唐韻引與此同、知此亦從

唐韻引之也、小爾雅、廣鳥篇有是文、文選補亡詩注、盧諶贈劉琨詩注、後漢趙典傳注、並引小爾雅亦

與此全同、則此爾雅上脫小字無疑、蓋唐韻誤脫、源君唐韻並承其誤也、今不徑增、按水經注載是文、

亦誤云爾雅、孫氏或因之、希麟音義引作廣雅亦非、說文又云、鳥象形、段玉裁曰、鳥字點睛、鳥則不、以

純黑故不見其睛也、注所載哺字、音義與廣韻同、蓋引唐韻也、〇中按玉篇云、鴉、鳥也、今作鴉、廣韻亦

云、鴉鳥別名、鷗上同、即此所引義、蓋統言之也、析言之、則鴉鷗鷗也、

〔干祿字書平聲〕鴉鷗上俗下正

〔段注說文解字四上〕鳥、孝鳥也、謂其反哺也、小爾雅曰、象形、鳥字點睛、鳥則不、以純黑故、純黑而反哺者謂之鳥、象形不見其睛也、哀都切、五部、孔子曰、鳥行